

2021年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(秋期・一般選抜) 問題

外国語 (日 本 語)

一、次の文章を読んで、後の問に答えよ。

小説を読むとき、そこに生きる人物たちやそこで起こる出来事はわれわれに働きかけてくる。読者の誰もが小説を読んで、すっかり(1) ミリオウされたのでもいい、打ちのめされたのでもいい、陰鬱な気持ちに落ち込んだのでもいい、とにかく心を揺さぶられる経験をしたことがあるはずだ。だが、その反対のことは可能だろうか。つまり、われわれのほうから作品に対してなんらかのかたちで働きかけることはできるだろうか。たとえばフローベールの『ボヴァリー夫人』を読むとき、われわれはヒロインのエンマが凡庸な夫との(2) タイクツきわまりない日常生活から逃れようと、愛人との逢瀬に(3) 溺れ、借金を重ねていくのをただ見つめることしかできない。彼女が破滅への道をまっしぐらに突き進んでいるのはわかりきっているのに、われわれにはそれを止める手だてはまったくない。当たり前だけれど、これが、あなたの身近な存在であつたら話はちがう。たとえば、あなたの友人や、姉や妹が、不倫の泥沼にはまり込んだり、高額なブランド品を買いあさるために借金に借金を重ねたりしているのを目にしたら、あなただつてただ黙つて(4) ア はいないはずだ(そうでもないのかな?)。そんなことはやめたほうがいいと厳しく、あるいはさりげなく助言を与えようとするだろう(しない?)。いずれにせよ、現実に行動を起こすかどうかはともかく、その気になれば(4) 介入することはできる。思いどおりの結果になるかどうかはさておき、少なくとも当該の人物に働きかける可能性はつねに存在する。

もちろんわれわれは作中の人物に同化し、その人物の思考や感情、その人生をまるで自分のものであるかのよう_うに生きることができる。そうやって作品という巢穴は、われわれをいわば住人として受け入れてくれる。しかし読者とはずいぶんと特殊な住人である。周囲の現実につきい介入する権利も力も持たず、いわば傍観者としてしかそこに住めないのだから。ちょうどカフカの「巢造り」の「私」がどこと特定できないところから聞こえてくる雑音に(5) イ を傾けているように、われわれにできるのはただ、作品というどことも知れぬ場所から聞こえてくる「声」に(6) イ を澄ますことだけである。しかし(7) イ を澄ませていると、変化が起こる。そのうち不意に自分がどこにいるのかわからなくなる。周囲の景色が消えて、「いま、ここ」とはちがう世界のなかにわれわれはいる。「没頭する」「夢中になる」「(8) ウ」という言葉が示しているように、作品のなかに入りこむためには、われわれはいったん「自己」から離れる、あるいは「自己」をどこかに置き忘れて、作品に身を投げ出さなくてはならない。そのとき、われわれのありようは受動性そのものである。

それにしても作品が――それが書かれた時代も場所も、われわれの生きる時代と場所とは遠く隔たっているにもかかわらず、われわれに働きかけるなどということがどうして可能なのか。そんな遠い、われわれの生活に直接的な関係もないような風景に、われわれが没入することができるのはどうしてなのか。

虚構(フィクション)の世界は、それがどんな種類のものであれ、つねに人間に関わるものだからだ、とルー・マニア出身の文学理論家のトマス・バヴェルなら答えるだろう。「世界」という語に含まれる、「環境」「人間

成	
續	

のすみか」という意味を重視しながら、フランスのコレージュ・ド・フランスでの講義『文学をどのように聴くか?』のなかでバヴェルは言う。虚構の世界、「それは数ある世界のうちで唯一、わたしたちを迎え入れてくれるものであり、したがって、わたしたちが身を(5)委ねることのできる唯一のものなのです。そのような世界とわたしたちの親近性はとても強いので、いったんそのなかに入ってしまうと、縁も エ もほとんどないのに、わたしたちはその世界に暮らすどんな人ともつきあうことができるのです。遠くにある虚構的世界は、時間的あるいは地理的に相当の距離によってわたしたちから隔たっていますが、そこに移動していくことに、わたしたちは何よりも大きな喜びを感じると言ってもよいでしょう。この距離をわたしたちは耐えるだけではなく、たいていの場合好むのです」。さらに、芸術一般、とりわけ文学の役割とは、われわれの「いま、ここ」を問い直し、個々人を狭隘な人生経験の外に連れ出すことなのだとバヴェルは言う。目に見えるものの向こうにある、あるいは見えるものによって逆説的にも見えなくなっているものを、感じ取らせてくれるのが芸術作品なのだ。「だから作品に身を委ね、作品が提示する世界に向かって日常生活を離れるとき、わたしたちは作品の内部で、作品が出現させる外観から作品が感じさせてくれる理念へと通じる道をたどろうとしているのです」。

(小野正嗣『ヒューマニティーズ文学』〈岩波書店〉による。54～57頁)

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字はその読みを記せ。

- (1) (2) (3) (4)
- (5)

問二 空欄アにあてはまる最も適切な語句を次の中から選び、○を付けよ。

- ① 目をそむけて ② 鼻をたくくして ③ 手をこまねいて ④ 指をくわえて

問三 空欄イに共通してあてはまる最も適切な語を、漢字一文字で答えよ。

問四 空欄ウにあてはまる最も適切な語句を次の中から選び、○を付けよ。

- ① われを忘れる ② 気を失う ③ 目が回る ④ 腰を抜かす

問五 空欄エにあてはまる最も適切な語を答えよ。

問六 傍線部「われわれが没入することができるのはどうしてなのか」とあるが、そのようにできるのはなぜか。
本文の内容に即して説明せよ。

二、問一〜二に答えよ。

問一 次の文中の空欄(①)〜(⑩)に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の()内に直接記入せよ。

文科系、理科系(①) ()問わず、大学や社会で非常に大切なのは、しっかりと文章が書けることだ。「しっかりと文章」というのは、なにも名文でなくてもいいから、論理的でわかりやすい文章のことである。言い方を変えれば、筋(②) ()通っていて、何が言いたいのか(③) ()伝わってくるような文章のことである。ところが、高校までの勉強というのが、こうした力を育てることにあまりなっていない。とくに、「わかりやすい説明文を書く」という力(④) ()、「説得力のある論説文を書く」という力が、なかなか日本の教育の中では育てられていない。

小論文コンクールでも、入試(⑤) ()の小論文でもよいから、書くチャンスというのは、最大限(⑥) ()利用したほうがいい。「書きたいときに書く」とか「習慣的に日記などの文章を書く」というのは、多く(⑦) ()人にとってなかなかできないことだ。正直なところ、ぼくのようにものを書くことを仕事にしている人間でも、書き始めるまではけっこう気(⑧) ()重いのである。たとえば、山登りのようなもの(⑨) ()、たいへんそうだし、なかなかふんぎりがつかず、ついつい先送りになってしまう。ところが、登りはじめれば、なんとかがんばることができる。人間にとって、途中でやめることは、逆の抵抗感があるのだ。そして、やっと頂上(⑩) ()に至ったとき(つまり、文章ができたとき)には、なんともいえない達成感がある。

(市川伸一『勉強法が変わる本 心理学からのアドバイス』(岩波ジュニア新書)による。152頁)

問二 次の文中の空欄（①）～（⑩）に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

今日、少なくともわが国では、すべての子どもは学校へ行くことになっています。すべての親は子どもを学校へ

（①） なければなりません。

学校へ（②）

人として（③）

（ ） となるでしょうか。法律により罰せられます。また、「学歴」がないので、一人前の社会人として（③） （ ）は大変難しくなります。学校で教わる「知識」がないと、社会生活を円滑に

（④）

（ ）ができません。私たちの社会は、一応は、文字が読めること、字が書けること、簡単な計算が

（⑤）

成り立っているのです。ですから、学校体制から脱落することは、多くの場合社会から（⑥）

（ ） ことになってし

まうのです。逆に学校で成功を納めることは、社会で成功を納めるための第一歩と考えられやすいのです。

このように、今日の社会では、学校は一般社会人のもつべき知識や技能を習得させ、「学歴」を与え、その「学歴」に応じて、社会的地位を保障するというしくみになっているのです。学校と一般社会とは、もちつもたれつの関係にあります。「良い学校を出ている」という卒業証書で、高い社会的地位を（⑦）

（ ）ので、人びとは「良い学校」へ殺到しますし、社会も、「良い学校を出た人たち」が（⑧） （ ）れば、高度の知識や技能を「前提」にして社会をより効率的に管理運営してい

けるわけですから、学校も社会も、良いことばかりで、文句のつけどころのない話のように見うけられます。

このように、すべての人は学校へ行くべきだと（⑨）

くなりました。その結果、「学校」というところは、「学歴」を与えるところは、「学歴」を前提とせざるを得な

（⑩）

（ ）とみなされるのです。また、学校で教えることは、社会が「前提」とみなしてよいような、「万人共通の、標準的な知識や技能」であり、これらの確実な伝達こそが、学校の最大の役割ということになります。

（佐伯胖『子どもと教育 「わかる」ということの意味「新版」』（岩波書店）による。191～193頁）

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

幾何学で習った幅のない線とか広がりのない点とかいったもの、そういうものを目で見ることができるだろうか。ここで、できない、という答えは早すぎよう。新聞紙の「端」だとか三色旗の色の境目だとかは幅がないはずだがとにかく「見える」のだから、そして新聞紙の四隅も広がりのない点ではないだろうか。しかし白紙の上にペンキやインクで幅のない線を引いたり広がりのない点を打ったりすることは明らかにできない。「端」だとか「隅」だとかはある物質の広がり、「限界」なのであり、だからその限界自身は物質ではない、したがって物質で作図することはできないからである。だから白紙の上に幾何学的な線や点を「見る」ことはできない。

それなのにわれわれが紙の上で幾何学をやれるのはそのような点や線を「考えて」いるからである（そのことをプラトンは「心の目で見る」と表現した）。紙の上に目で見えるように描かれた三角形の辺はもちろん幅のある線である。だからその三角形には幾何学の定理は厳密にはなりたたない。しかしわれわれはそのインクの三角形をいわば挿し絵として幾何学の三角形を「考え」、そうして考えられた三角形について定理を証明するのである。

これはほんの一例であるが、われわれに物事が現れる仕方には大別して二種類ある。見える、聞こえる、触れる、等といった知覚的な現れ方と、考えるという現れ方とである。これはあくまで大別しての二種類であるが、この大別のコントラストは非常に大切ではないかと私は思う。

考える、というと、人はえてして、頭を悩ませる考えごと、頭の痛い問題、要するにロダンの「考える人」や半跏で頰杖ついた弥勒菩薩のような格好でやるものだと思いがちである。しかし、買ひものに歩いている主婦もまた今晚のおかずを「考えて」歩いているのである。またバスの中で思い出し笑いをしている勤め人も何かを、「考えて」いるのである。もつともこういう場合を考えてパスカルは人間を「考える葦」だと言ったのではないだろうか。しかし、夕飯のおかずといった未来の事物、昨晚のつまましい楽しみ事といった過去、こうした未来や過去の事物は知覚的に現れることはできない。現在ただ今その夕飯を味わうことはできないし、現在ただ今昨晚の楽しみを楽しむことはできない。知覚的に現れるのはただ現在ただ今のことだけなのである。だから未来や過去はただ「考える」という仕方で見ることができただけである。そしてどんな人でもいくばくかの未来や過去のことを考えていない時はないだろうから、人は常時「考える人」なのである。だから実は、「考慮中」とか「考えておく」というのは政治家や役人の専売言葉ではないのである。人は誰しも常時考慮中なのである。

しかし、晩のおかずを考えるのと、数学や人生の問題について考えるのでは大分様子が違うではないか、そう言われる方も多いであろう。それは全くその通りである。だがその様子の違いはどこにあるのだろうか。それはいわば映像の豊かさ、とでもいったものの相違だろうか。晩のおかずを考えるとき、肉や野菜の生き生きとした、時にはよだれのでる映像が浮かんでくる、それに対して数学の問題を考えるときは何の映像も浮かんでこない、浮かんでくるのは問題とは何の関係もないあれこれ気の散る映像ばかり。

それは間違ではない。しかしここで注意しなければならないのは、それらの「映像」は見たり聞こえたり、つまり知覚的に現れる映像ではない、ということである。それらは考えられた映像なのである。前にも述べたことであるが（3 記憶について）、それらは見つめることのできない、見つめることのできる細部を持つことのできない、映像なのである。今晚のおかずを考えている主婦はどんなに努力しても予定のコロッケの、例えば右の端を見つめることはできない、その衣の凸凹ぶりや焦げぶりを。それは何もそのコロッケがボンヤリしか見えていないというがためではない。ポケた写真でも霧ににじんだ物影でもその細部は完全に明瞭なのである。それらが「ポケた」といわれるのは単に、明暗や色調の移行が他に比べてゆるやかであるからにすぎない。知覚的な現れ方にあつては真の「不明瞭さ」というものはありえないのである。それに対して、「考えられた」コロッケは見つめるべき細部を持つことができないのである。このことが、「見る」ことひいては「知覚する」とことと、「考える」とこととの基本的な相違なのである。

（大森莊蔵『流れとよどみ―哲学断章―』（産業図書）による。57（51頁））

[illegible]